

チバクロバネキノコバエの発生について

- 1 病害虫名：チバクロバネキノコバエ *Bradysia impatiens* Johannsen
- 2 発生作物：いちご
- 3 発生の経過
令和3年2月上旬、県南部のいちごほ場（高設栽培）において、生育不良株が認められ、葉縁部やクラウン、根の褐変(図-1、2)及びクラウンを加害しているハエ目幼虫が確認された(図-3)。
発生ほ場から成虫を採取し、農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県のいちごにおいて被害が未確認であるチバクロバネキノコバエであることが確認された。
本種によるいちごへの被害はこれまで三重県、長野県、長崎県、佐賀県、茨城県、鹿児島県及び福島県の7県で特殊報が発表されている。
- 4 形態等の特徴
 - (1)本種はハエ目クロバネキノコバエ科の昆虫で、体長は雌成虫が1.9～2.3mm、雄成虫が1.8～2.1mmで、頭部は黒色、胸部と腹部は暗褐色、翅は褐色を帯びた透明である(図-4)。老齢幼虫の体長は約4mmで、頭部は光沢のある黒色、体は白色を帯びた透明である。
 - (2)成虫は未熟な堆肥等の有機物に誘引され、産卵する。孵化した幼虫はこれを餌とし、大量発生した幼虫が作物の主に地際部や地下部を加害する。また、いちごでは花房や葉への加害も報告されている。本種は20～25℃では約15日で1世代を経過する。施設栽培ハウス等では周年発生する。
 - (3)従来チビクロバネキノコバエ (*B. agrestis*) 及びチバクロバネキノコバエ (*B. difformis*) とされていたものは、最近の分類学的研究により、*Bradysia impatiens* Johannsen (和名：チバクロバネキノコバエ) に整理された。
- 5 寄主範囲
いちご、きゅうり、すいか、ねぎ、メロン、しいたけ、テッポウユリ、トルコギキョウ、リンドウ等多くの作物に寄生する。
- 6 防除対策
 - (1)未熟な堆肥を施用すると成虫を誘引し産卵を促すので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む基肥を施用する場合には十分に土壌混和する。
 - (2)ほ場周辺部に古株などの植物残さ、堆肥舎がある場合には、発生源になりやすいため、周辺の衛生に留意する。
 - (3)多湿条件で発生が多いため、適正な水分管理に努める。
 - (4)幼虫の寄生が見られる花房や葉、萎れ等被害が見られる株は除去し適切に処分する。
 - (5)被害が認められる場合には、いちごのクロバネキノコバエ類、または、チビクロバネキノコバエに適用のある薬剤で防除する。なお、薬剤防除にあたっては、蜜蜂等の有用昆虫への影響に注意する。

7 資料



図-1 生育不良株(葉縁部の褐変)



図-2 生育不良株(クラウンと根の褐変)



図-3 チバクロバネキノコバエの幼虫



図-4 チバクロバネキノコバエの成虫(雌)

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所	TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場	TEL 018-881-3326
掲載HP https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/	